HAKODATEコンシェルジュ養成プログラム　科目概要
⑤地域づくり支援実習
地域政策ボランティア実習Ⅰ（国内）を含む

北海道教育大学函館校 地域協働推進センター
センター長　齋藤征人

1. 実習の概要

地域づくり支援実習は、学生が観光や教育等に課題を抱える地域に一定期間（原則として10日間以上かつ90時間以上）滞在して、それらに関する就業体験を行うことによって、当該地域の振興に必要な実践的能力を育成する地域滞在型インターンシップです。当該科目は3年生以上を対象としており、1～2年生が実習を強く希望した場合には、同様の地域において、地域政策ボランティア実習Ⅰ（国内）としての履修を認めています。2021年度は、以下のテーマのもと道内4地域で実習が行われました。括弧内は実習受け入れ先及びコーディネート団体、人数は実習生数です。

①地域と子ども（震災後の子どもたちとの交流と農業体験） 厚真町（厚真町教育委員会・NPO法人ezorock）…4名
②行政による地域振興（移住・定住を切り口とした実施予定事業への企画立案） 森町（森町企画振興課・株式会社商舎）…5名
③民間による地域振興（廃校跡施設のリノベーションプロジェクト） 八雲町（NPO法人やくも元気村・株式会社木蓮）…4名
④第1次産業による地域振興（農業インターンシップと中学校との交流） 厚沢部町（厚沢部町教育委員会・厚沢部町農楽会）…7名

2. 実習生と実習担当者の声

2021年度に受け入れをお願いした4カ所の実習先のうち、厚真町と厚沢部町それぞれの実習生の声と、実習担当者のコメントをご紹介します。

（1）厚真町

1）実習生の声（地域教育専攻4年 大岩みやび）

厚真町教育委員会の斉藤烈さんの生き方や価値観、厚真町への熱心な姿勢など、お話を聞いていると烈さんの人間性がひしひしと伝わってきました。地域に実際に出向いて、地域に飛び込んで、地域の人たちからの信頼や信用を獲得することや、失敗から学ぶことなど、烈さんとの交流を通して自分自身の精神が少し磨かれたような気がしました。また、烈さんは「ど～でもいい話」「無駄な話」こそ大切なんだとおっしゃっていました。実際に、みんなで「ど～でもいい話」を言い合ってみると、それだけで少し距離が近くなったように感じました。他者と関係を作っていく時に、ほんの一瞬でも議題に関係のない話で肩の力を抜いて、一緒に笑い合う時間を共有するだけで、関係が築かれていくことに繋がるのを実感しました。

本当にこの実習に参加してよかったという気持ちでいっぱいです。無知の自分を知ったこと、自分の弱みを責めなくなったこと、他者を思いながら適度な距離間で関わること、多くの大切な出会いがあったこと、いろいろな人の様々な経験談を共有できたこと、何事も自分事として捉えることの大切さを知ったこと、子どもとの関わり方に大きな学びがあったこと…など、言い出したらキリがないですが、とにかく参加する前の自分とは明らかな変化を感じます。小学校の先生になる前に、多くの“初めて”を経験できて、本当によかったと感じます。

2）実習担当者のコメント（NPO法人ezorock 草野竹史氏・水谷あゆみ氏）

厚真町での実習は今年度で3年目を迎えました。毎年、“教育”というひとつの切り口から多様な考えや視点に触れるプログラムを展開しています。災害によって大きな影響を受けた厚真町で、断片的な課題を知るのではなく、その地域の暮らしの中に身を置くことでまちの課題を立体的に捉えていくことが大きな学びに繋がっていると感じています。

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により実施が危ぶまれるほどでしたが、滞在場所を苫小牧の自然学校のフィールドに移し、何とか実施することができました。苫小牧の森の中では、民間セクターによる野外教育の現場や動物たちとの触れ合いを、厚真町では様々な教育現場での葛藤に触れた10日間でした。このプログラムでは、私たち受入側が準備したり、伝えられることにも限りがあります。早朝の動物の世話から、毎晩の振り返りまで学びのヒントはあちらこちらに転がっています。ただ与えられるものをこなすのではなく、自分たちで気づき、言語化しながら考え、自分の中に落とし込み、落とし込みきる前にまた新たな気づきを得る。その連続である10日間は決して楽ではありませんが、それぞれの学生さんが得た学びは一過性のものではなく、その後も考えを続けたり、自分自身に問い続けていくような大きなものだったのではないでしょうか。毎年試行錯誤をしながらではありますが、地域の方とともに作り出す貴重な機会に、今後も多くの学生のみなさんに参加していただきたいと願っております。

（2）厚沢部町

1）実習生の声（地域政策グループ2年 山崎裕香）

今思い返せば、厚沢部で経験したことのほとんどが強く印象に残っています。2週間ほぼ毎日早起きをして、イモを収穫して、みんなで夜ご飯を作って食べるという経験は、普段の大学生活から考えるととても非日常的なものでした。私がお世話になった農家さんにはベトナム人の外国人技能実習生が1人働いていて、その方と一緒に作業したことや、ベトナムで大学に通う妹のために働いているというエピソードも印象的でした。体力的に少し辛い場面もありましたが、農家の皆さんが本当に優しく、それに応えたいという思いから頑張ることができました。メンバー内で少し意見の食い違いが発生し一時はどうなるかと思いましたが、担当者の荒木さんの協力もあって最後までやり遂げられたので本当に良かったと思います。厚沢部中学校での「生き方学習」の授業では、班の子どもたちが目をキラキラさせながら話を聞いてくれたことがとても印象に残っています。また、途中一日お休みをもらったときに厚沢部町を観光したことも印象的でした。自転車でカフェに行った帰り道に大雨に降られたことも良い思い出です。

この実習の経験から、人と関わることが前よりもっと好きになったと感じます。今までは人と関わるということに関して少し消極的な部分があったのですが、前よりも積極的に行動できるようになったのではないかと思います。共同生活でも農作業でも、今何をすべきなのかをいつも考えていたので、人間性についても少しは成長できたのではないかと思いました。また、今まで言葉は聞いたことがあっても遠い存在だった外国人技能実習生という人たちを、一気に身近に感じました。そして、スーパーに行ったときに厚沢部産の野菜を探すようになったことも自分の中で変化したことであると思います。

2）実習担当者のコメント（厚沢部農楽会事務局 荒木敬仁氏）

2021年度に初めて北海道教育大学函館校の実習生の受け入れを行いました。厚沢部町は道南に位置する内陸の町です。農林業の第一次産業が主幹産業でありますが、近年は労働力不足など課題を抱えています。厚沢部農楽会では夏の期間全国から農業アルバイターを誘致していましたが、感染症の影響で大々的に募集ができず困っていました。

そんなところ函館校の齋藤征人准教授から教育大生の受け入れのお話をいただき、感染症対策をしっかり行った上で7名の学生が当町を訪問、約2週間の農業ボランティアを基本とする活動に従事いただきました。みなさん農業経験が無いということで、農家からは農作業させても大丈夫だろうかとの心配もありましたが、そんな心配が無駄だったと思うほど一生懸命に取り組んでいただき、農家からは喜びと感謝の声を聞いております。

農業従事以外にも当町の中学生とも交流いただき、教育大生自身の経験や夢を中学生にお話しいただきました。中学生にとっては高校以降の勉強方法やお兄さんお姉さんの将来の夢を聞くことがとても新鮮で楽しかったと感想をいただき、学校現場からもぜひ継続させたいと好評いただいています。

学生の皆さんから自主的にゆるキャラ「おらいもファミリー」のグッズ案等、まちづくりに関してのアイディアもたくさんいただき、役場担当者とすぐ共有しました。若者目線の斬新な案に役場担当者と感心しました。来年はグッズが道の駅に並んでいるかもしれません。

ただの農業ボランティアにとどまらず、今回受け入れを行ったことが厚沢部町としてとてもプラスになりました。私たちとしても参加していただく学生に厚沢部町でしか経験できない貴重な機会を提供していきたいと思っております。ぜひお互いにとっていい形でこの関係を継続していければと考えております。

厚真町の実習風景

厚沢部町の実習風景